

高尾山 歴史の散歩道

明治大学博物館

外山

徹

60

大見晴台 その2



高尾山頂から見られる冬至のダイヤモンド富士 (撮影・高岡輝幸氏)

現在の大見晴台は三六〇度の眺望とはゆかないが、そのハイライトはやはり西の彼方に見晴るかす富士の高嶺であろう。この眺望は信仰の地としての高尾山にとって大きな意味を持つに違いない。ここまで辿ってきた道筋は、江戸後期の『八王子名勝志』に「これ通例富士参詣の間道なり」と記されたように、高尾の尾根筋は城山、小仏峠を経て富士山へ向かう道であった。

富士信仰と高尾登山

神々しく優美な姿をした富士山は、一方で噴火を繰り返す荒ぶる火の神として畏敬の対象であった。その信仰の歴史は古代に遡るが、庶民信仰として本格的に興隆するのは、江戸期以降のことである。江戸で富士信仰を広めた始祖は長谷川角行だった。角行は戦国の乱世が治まり人々に平穏がおとずれることを祈念して諸国を巡る内、富士山を修行の地

と定め、徳川氏による江戸開府の後、教えを人々に広めたと言われる。富士信仰が盛行となるのは江戸中期のこと、享保一八年(二七三三)に食行身縁という行者が富士山七合目付近で入滅したことを契機に、身縁の弟子たちによって多くの富士講が組織された。そして、一八世紀以降、富士山の御縁年である庚申の年を中心に富士参詣の流行が周期的に繰り返されることになる。

葉王院文書の中には、享保四年(二七一九)六月二日付で「富士参詣泊り」という記録が残るが、富士参詣の途上に高尾山に参籠する行程はよく知られている。この時は五三人という大勢が宿泊し、毎年泊まっていた者もあつた。まづ、当時の富士参詣には人数が多すぎる。そもそも参詣講の結成は、費用の互助と信仰活動の継続を目的として、代表者による参詣をおこなう代参講という形式が一般

的であつた。その場合、五二人もの大人数で旅をするとは通常考えにくい。この宿泊については全員が富士山まで行くわけではなく、途中まで同行する者が数多くあり、その中には毎年高尾山に泊まる人物があつたという解釈が妥当だろう。講中が揃って大見晴台から富士を拝み、代参者を送り出して帰途に着いたという推察となる。高尾山が富士山の遥拝所であつたことについては、富士浅間社の存在にも裏付けられる。現在は奥之院不動堂の背後に富士浅間権現が祀られているが、江戸期においては、一ノ宮の途次、現在のエコーリフト乗場の近辺にあつた。この浅間社祭祀の経緯として『八王子名勝志』は興味深い逸話を記す。小田原記異本を典拠とし(北条氏治世下において)甲州・武州が乱国となり国境に関所が設けられ、富士山へ参詣する宿路が塞がれてしまったことから、甲

州吉田(富士吉田市)の御師(宿坊経営の宗教者)たちは渡世に困り策をめぐらした。武蔵国八王子に高尾山という行基菩薩開山の地があり、葉師如来が本尊であるが、ここへ富士山の浅間大菩薩を勧請した。吉田の御師はみな八王子へ移り、富士浅間が高尾へ飛びたもうたと披露したところ、東北・関東から、長年関所によって参詣できなかつた道者らがこれを聞いてことごとく参詣し、八王子高尾山はたちまちに繁昌した、というものである。

後世の記事でもあり、その真偽は定かではないが、一説に高尾山の浅間社は小田原の北条氏によって勧請されたとも言われている。確かに北条氏と武田氏の抗争によって小仏峠の西方がその最前線となれば、関東方面からの参詣路は閉ざされてしまう。高尾山を祈禱所としていた北条氏が、その地を富士の遥拝所と定めたとも考え

られなくはない。なお、当時の文書によると、小仏峠上にあつた関所は、一名「富士関」とも呼ばれていた。

遙かな古代へ

富士山の眺望とともに、この地にまつわる重要な事柄がある。紫色に暮れなすむ富士の真後ろに沈む夕日はダイヤモンド富士の名でよく知られるようになったが、それが冬至の日の前後に見られる光景であるということは重要な意味を持つと考えられる。このことは偶然ではないだろう。

今では一年で一番陽の短い日というくらい認識しかたないが、冬至はかつて重要な祭儀の日であった。冬至の陽光に人類がどれほどの思い入れを持っていたかについて興味深い事例がある。アイルランド共和国の首都ダブリンの郊外には、ニューグレンジと言う墳丘遺跡がある。直径約七九〇八五メートル、高

さ二メートルの巨大な墳丘は今から五千年も前の造営と推定されているが、この墳丘には驚くべき遺構が残されている。墳丘側面の開口部から羨道を経て内部には石室が設けられているが、何とこの石室には、一年の内、冬至の日に一七分間だけ光が射し込むように出来ている。五千年前の古代人は一九メートルの隘路を通し、三六五分の一日の確率で太陽光を射し込ませるといふ計算技術を持っていたのである。

墳丘造営の目的は確定されていないが、人々が冬至の日の太陽光に尋常ではない意味を感じており、その光が祭儀と密接な関わりを持っていたことは間違いない。暖かな陽光の光をもたらす太陽に対する原始的な信仰は汎世界的なものと言えるが、日本にも冬至にまつわる祭儀は数多く伝えられている。霜月祭は一般に稲作の収穫祭とされているが、それ

は曆ができる以前に稲作を通して認識されていた二年という時間の終りが始まりに転ずる瞬間として理解されている。それは民俗学では「魂の生まれ清まり」という復活再生の儀礼とされているが、霜月祭は元来衰えた陽光の再生を願う日、つまり太陽の再生の祭であつたのである。

このように、冬至の時期に太陽が富士山の真後ろに沈む光景が見られる場所が存在することを、古代人が認識していたことは充分考えられる。小仏峠は甲州街道が付け替えられる以前は長らく交通の要衝であつた。また、道というものが人為的に整備される以前の通行路は川筋・尾根筋を辿るものだったと考えられている。小仏から続く高尾の尾根筋が先史の時代に西方と関東平野を往来する道筋になつていった可能性がある。太陽神再生の祭儀の場所として、高尾山が交通の要路の程近くに存在してい

たということなのかも知れない。ダイヤモンド富士は仏の背後から後光がさしているかのように見える。ある時期にこの光景と仏教とが習合してから、高尾山が仏教の聖地として認識されるようになったということかもしれない。そうすると、高尾山の信仰の山としての歴史は、行基菩薩の開山の伝を遙かに遡ることになる。

大見晴台から富士山を望み、遙かな太古の人々の信仰に思いを巡らせつつ、稿を閉じることにしたい。八王子の追分から出発し、高尾山の参詣路を辿りつつ歴史のエピソードや史跡の紹介をしてきた本連載は今号で最終回となりました。次号からは「葉の祈禱所」と題して、紀伊徳川家との関係を軸に、葉王院文書の紹介を交えながら高尾山の歴史に言及する連載を予定しています。